

〈総論〉いま式内社が危ない

朝廷から重要視された神社を一覧にした『延喜式神名帳』。そこに記載された、かつて格式のあった神社がいま危機に瀕しています。かつて栄華をきわめながら、現在は見向きもされない延喜式内社にふたたび光を当てるにはどうしたら良いのか。事業再生を本職としながら地元徳島でフィールドワークを続けるオキタリユウイチ氏が、古社の本来の姿を問い、再興のための手立てを探ります。

——オキタさんはもともと事業再生や企業のブランド化を本業にされていますが、いまでは各方面の有識者に日本の古社を案内する活動をされているそうですね。このような活動を行うようになったきっかけは何でしたか。

オキタ／私はこれまで、さまざまな企業のブランディングやマーケティング戦略を提案するような仕事をしてきました。その本業と同時に、キレる17才や自殺志願者を救うための社会活動も行ってきましたが、そこで重要だと感じたのが日本人にとっての「ルーツ」という大きなテーマです。

過去の歴史を振り返るかぎり、現代というのは、実は最も良い時代だと思っっているんです。切り捨て御免の絶対的な封建制にあつては、個人の人権は主張できないし、軍国主義の時代に至つては頭上から爆弾が降つてきた。

ところが、現代のような恵まれた時代にあつながら、なぜか多くの人々が強い「閉塞感」や「違和感」をもっているのか。その理由をひとりで述べるのは容易ではありませんが、おそらくは、身体に束縛された小さな自己ではなく、より大きな他者もふくめた世界そのものが自己であるかのような意識になるためでしょう。

考えてみれば、古来から私たち日本人はそのような大きな自己像で生きていたように思えます。古い神社や祭事に注目する理由もそこにあり、周囲の社会や祖先とのつながりまでが自己の延長であるという日本人らしい考え方が神社をめぐる営みに凝縮されていると感ずいたのです。日本人が神を祀るようになったのは、未来の子孫に至るまでその土地が豊かであることを願つたためであり、即時的な現世利益のためではありません。まるでUSBメモリーを使ってデータをコピーするかのよう、御祭神をコピー＆ペーストし別の場所に増やしていく分祀（勧請）の仕組みも、小さな自己が豊かになるためではなく、つながりを増やしていくことで周囲まで豊かにしていこうという発想に依ると考えられます。

神社の入口やそこにいたる参道にランドマークとしての巨大な鳥居を建造するのも、幾世にもわたつて神の所在を示すための方法ですし、各時代における職人技術の粋が集められた神社の木工彫刻もまた、数百年時代が経つても使用できるように耐久性が計算されるわけです。

そのように自己の利益よりも、他者への大義を果たしてきた祖先の仕事を目の当たりにすると、小さな有限の自己にこだわるのが無意味に思えてきます。神社を中心に営まれる暮らしがあるからこそ、日本人らしい本来の姿にいつでも立ち戻れるのです。

和感」をもっている。生きがいや喪失している人や、自ら死を考えている人もかなり多い。

このような負を抱えている人々に共通している点とは何か。それは必ずしも個人的なレベルでの欠点ではなく、もっと奥にある日本人としての「ルーツ」に関わつていようと思えたのです。

ここで言うところの「ルーツ」とは、日本人が日本人らしく在るための要素であつたり、過去から連続と続く先祖とのつながりのことですが、そのような本来性を自覚している人ほど、個人的な悩みにくよくよせず、パワフルに生きているという事実面に直面してきました。

分かりやすく言えば、「ルーツ」を自覚している人はしていない人よりもスパークしているということなんです。

これまでさまざまな企業の経営者や有識者を阿波の延喜式内社に案内してきました。あらためて数えてみると、百八十人以上を招いたことになりました。そのような活動を続けているのも、やはり実践とともに「ルーツ」を自覚してほしいという

——もともと神社があつたからこそ、日本人は本来の姿に立ち戻れたわけですが、現在では各神社の合祀や統廃合の問題が生じており、そのような状況のなかで日本人らしさも失われつつあるということでしょうか。

オキタ／日本人が生き生きとするためには「ルーツ」への自覚が必要であり、加えて神社を中心とする営みが欠かせないことをすでお話ししましたが、私は必ずしも全ての神社を等しく保持することが重要であるとは思っていません。

そこで、保持すべき核となる神社がどこに在るか判断するために、公式の尺度が必要になります。その手がかりを得る上で、最も参考になるのが平安中期（九二七年）に編纂された『延喜式神名帳』に記載された社と祭神の一覧です。

『延喜式』という書物はもちろん政治的な意図もふくんでいたもので、すべてを鵜呑みに出



オキタリユウイチ クリエイティブディレクター
株式会社 okita-museum 代表取締役・村式株式会社取締役
昭和51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の老舗企業再生等に従事。京都の老舗米屋をネットで17億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や日本財団と共催し障害者の起業支援を行うなど、社会的課題の解決に取り組む。

う狙いがあります。すでに社会的な知名度が高かつたり、情報発信力をもっている人に方法を伝えれば、やがて社会全体にも拡散していくのではないかとという期待があります。

——心の苦悩というのは、必ずしも個人的なレベルの問題ではないということですね。そのような「ルーツ」をめぐる問題から発して、古社に着目するようになった背景をお聞かせください。

オキタ／なぜ「ルーツ」を自覚している人が生き来るわけではありませんが、そこに記載されているのは政府が幣帛料を負担していた格式のある神社であり、おそらくは多くの神社の「元社」に当たる核となる神社が多いと考えられます。各神社の「元社」を守る理由としては、それが朝廷が認めた格式のある神社であること以上に、その土地と結びついた固有の物語を有しているという事実があるためです。私たちの成り立ちに関わる、おおもとの「ルーツ」に遡るためには、その由来に関わるストーリーがなくては手がかりを得られません。

たとえば、関東の「西の市」のルーツとなった神「天日鷲命」を祀る神社の起源は阿波の忌部氏にあり、天日鷲命を祀る忌部神社は徳島県内に数社ありますが、そのなかで特に重要なのは、種徳忌部神社と山崎忌部神社の二社ということになります。

神話では、阿波忌部の祖神にあたる天日鷲命が、関東（主に現在の千葉県）で農作物の不作に苦しむ人々に永続的な農法を教え、その結果感謝され関東一円の産業神として祀られ分霊されていくわけですが、その「関東地方に譲渡するための種を徳島中から結集させた山」が阿波の種穂山であることから、種穂山にある種穂忌部神社はこの物語に直結していると解釈できます。

一方の山崎忌部神社にも、実際に麻の種を植えて、天皇即位のための重要な儀式「踐祚大嘗祭」のために必須な鹿服という麻の御神体を制作してきたという事実があり、朝廷や今の天皇家にとつても重要な物語の舞台であつたと解釈できます。

つまり、この二つの忌部神社はいずれもこの関東一円の農法や産業のルーツであり、天皇家にも深く関係するルーツにあたる、優先して守るべき



重要な神社であると考えられるのです。

——式内社は優先的に守るべきものとして、認知されているのでしょうか。

あるいは、もはやそのような基準は過去のものとして忘れられているのが現実なのではないでしょうか。

オキタ／『延喜式』に掲載された神社は、格式を備えた神社であったことから、もともと立派な社殿をもち広大な社領を有していた社が多かったと考えられます。

しかしながら、かつての式内社に相当する神社を今日実際に訪れてみると、驚くほど社領が狭かったり、社殿がトタンやプレハブの粗末な材質だったり、注連縄がチープなナイロン製だったり、中には本殿が半壊しているものもあり、散々な有様です。私はこの事実には驚愕しました。

かつては手厚く敬われ、細かく手入れをされていた神社であっても、現在の姿はみすぼらしく、「本当に式内社なのだろうか？」と目を疑わざるを得ません。

なかには状態のよい神社もありますが、今となってはほぼ全ての式内社がかつてのような美観を備えていないのが事実であろうと思います。信じ難い悲しいことですが……。

——この『WAGO』での連載の意気込みをお聞かせください。

オキタ／私はこの連載を、式内社復興のためのファーストステップにしたいと考えています。

まずは私が訪れた式内社を中心に、毎号一社ずつ、さまざまな古社を取り上げていこうと考えて



阿波に伝わる、日本のルーツに深く関連する延喜式内社の本殿のようす。このように朽ち果てているものが多く、中には完全に消滅してしまい、今となっては社が実在していた場所すら曖昧なものもある。

いますが、いずれの神社も日本のルーツに関わる極めて重要な社でありながら、同時に「存続の危機」に瀕しています。

式内社が失われることで訪れる結末は、単に神社が失われるということだけではありません。要となる「元社」の喪失は、私たちの「ルーツ」を喪失することでもあり、つまりは日本の根源が忘却されることでもあるのです。

祖先の物語が失われるということは、日本人としての私たち自身が拠り所とするシナリオを喪失することでもあり、日々踏みしめている大地との関わりや自己のアイデンティティを見失うことでもあります。

日常、東京で仕事をしていると、新宿駅では日本語以外の外国語のアナウンスが流れており、コンビニで働く店員など日本人を見る事のほうが少ないぐらいです。今後二十〜三十年の単位で日本の人口の激減を考えると、やがて東京に住む日本人は四〜五人に一人、なんて日が来ると思います。

そうなった時、「日本とは一体何なのか」「日本人とは一体何なのか」という深刻な問題に直面していくと思われまます。

そんな中で、地域に残る古い神社というのは、唯一、私たちが自身とその奥にある大いなる自己を自覚できるタイムカプセルであり、だからこそ喪失してはならない特別な場所なのです。

日本人はすべて祖霊は何らかの神として祀られている。その子孫が私たちである……。そのような具体的に自覚し続けるからこそ、私はパワフルで居られるわけですが、日本人ならば誰にでもそのような原郷があるはずなのです。

インタビューより編集構成／聞き手・石黒壮明